

第Ⅱ部

25年後の主役たちに残すメッセージ

1. 雲仙プラン100策定委員会 委員からのメッセージ

(順不同、敬称略)

元長崎県自然保護課長	瀬田 信哉
株式会社JTBコミュニケーションズ九州 代表取締役社長	小俣 郁雄
有限会社大渡企画・設計 代表取締役社長	大渡 剛弘
株式会社まちづくり研究所 代表取締役	吉田 道郎
財団法人阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長	坂元 英俊
島原振興局 管理部長	西 貴史
雲仙を美しくする会 会長	七條 健
雲仙ロータリークラブ Re. Born 雲仙50実行委員長	宮崎 高幸
元雲仙旅館ホテル組合 組合長	豊田 康裕
雲仙商店協同組合理事長	本多 善彦
雲仙自治会 会長、小地獄・札ノ原自治会 会長	森 義春
雲仙湯の町通りを考える会 会長 雲仙温泉まちづくり事業 委員長	加藤 一隆
雲仙市観光協議会 副会長 島原半島ジオパーク推進連絡協議会員	加藤 宗俊
雲仙小浜地域審議会 会長	宮田 隆
第5回ジオパーク国際ユネスコ会議組織委員会 事務局長	杉本 伸一

雲仙への思いを綴る記

元長崎県自然保護課長

瀬田 信哉

(はじめに) 30年前、私たちは雲仙のビジターセンター基本設計に関連して「雲仙プラン50」を提案しました。仮設の公民館に鯨岡環境庁長官を迎えて、街づくりのための懇談会も開催しました。あの当時の雲仙温泉のリーダーはみんな鬼籍に入られた。この方々を第1世代とすると、私と同年代でプラン策定に参加された第2世代の人たちも、経営を第3世代に委ね、今では雲仙全体の発展と維持に苦心しています。この間に普賢岳噴火という天変が起り、リーマン・ショックという人為の失態は今も尾を引いています。島原半島は天変の災害からは復活できたものの、世界経済の失墜は雲仙にとっても他人事ではありません。「雲仙プラン100」のワーキングチームメンバーである第3世代は、雲仙の将来像を描き、自らがそのプロジェクトを遂行していく重責を担っています。そして、私が知らない第4世代の人たちが、雲仙国立公園指定100周年記念事業のテープカットをするのです。第3世代は第2世代の人たちから歴史的背景と知恵を学び継承するとともに、未来を見つめる先見性をもって進んでください。雲仙温泉は大きな家族でもあるのです。

観光協会や旅館組合などのリーダーが雲仙を引率し、「松の会」といわれた女将を中心とする婦人会も活発に活動していた時期に、私は雲仙での仕事をさせてもらいました。感謝の意を表して以下に思い残すことを書き記すことにします。

1. 旅は、未知なるものに惹かれる過程であり、道連れである。

私は5回にわたる「雲仙プラン100」の会議に参加するため、異なったルートを選んで往來しました。それは、雲仙に至る経路には多様なルートが用意されていることの証です。旅は到達点に結果があるのではなく、そこに至る過程にこそ意味があるのです。

10月下旬の第5回会議には、30年ぶりで島原鉄道に乗りました。ボックス座席では、地元の人とも、遠くからの旅人とも道連れになれます。同乗の10人の高校生は、大垣から米原・大阪・博多・諫早と鉄道を乗り継いで島原に行く途中でした。JR西日本の9月14日発表によれば、九州新幹線開通によって航空路線に比較して鉄道のシェアが、大阪・熊本間では3割から6割に増えたそうです。個人客の比率ならさらに拡大していくでしょう。

雲仙を訪ねる旅人のために、雲仙に至る公共交通によるルートには選択肢が多くあって、さらに雲仙から天草へ向かうバス路線も開設してほしい。長崎新幹線開通時には島原鉄道も健在で、列車と定期バスを乗り継いで訪れる人たちを歓迎したいものです。

雲仙に住むどの世代の人も、一度は島原半島全域を旅人感覚でもって巡り周ってください。島原半島巡りには、正確で詳細な地図が必要だと気付かれることでしょう。地図とはいえないイラストマップでは地形も地名も欠落しています。これでは他所から来た人に島原半島の全体像や雲仙の魅力は伝わりません。詳細な地図は、名文の行間を読むように、自然風景や文化や人の生業の空間が見渡せる羅針盤のようなものです。地元の人も旅人も、同じ図上で情報や意見の交換ができることが可能になる地図が不可欠なのです。

雲仙への道筋を提供できる縮尺5万分の1程度の島原半島全図をベースに、温泉、湧水、棚田、石橋、遺跡、ジオサイト、ジオポイントに加え、それぞれの集落情報も提示する。それが住民と訪

問者と観光に携わる人たちの三者に共通するコミュニケーション言語ともいえるベースマップになるのです。2012年55月の第5回ジオパーク国際ユネスコ会議までには、そのような地図が用意されていなければなりません。地図は与えられるものではなく、皆さんが島原半島という白図の上に描いて作るものです。

私は11月初旬に糸魚川ジオパークの地図を求めてフォッサマグナミュージアムを訪ね、24のジオサイトやジオポイントも記載された地図を入手しました。翌日に市役所に行き、拡大地図が欲しいと交渉しましたが、作業用にはあるけれど、頒布は困難という返事でした。ちなみに糸魚川市の面積は746平方キロで、島原半島の1.6倍、人口は3分の1程度です。

2. 国道の付け替えは結果であって、戦略的にはその^{プロセス}が重要である。

古湯再生を軸にした「カーフリー・国道迂回・ゆとりとやすらぎいっぱいのもち」プラン実現への過程に、私は強い関心をもっています。具体的であり、実現可能な雲仙の将来像だからです。「第3世代頑張れ！」とエールを送ります。迂回道路の整備（付け替え）は雲仙市の街路事業で完成させ、その後に国道に振り替えるのが現実的な選択でしょう。従前ならば、国道の付け替えを国に陳情し続けていたかも知れませんが、国土交通省にも事業を採択できる余力はないし、環境省も、県もわかりです。ではどうするのか？

現在工事中の県道千々石雲仙線の国道すりつけ合流点を、古湯ではなく原生沼を経て新湯でという選択肢もあるでしょうが、私は雲仙市の事業として進めてほしいのです。そのために雲仙温泉地区の住民が総力をあげて努力すべきことを、私はプロセスと呼んでいます。

多数の町が合併して誕生した雲仙市には、合併前から旧町ごとに課題が累積しているはずですが。農業・漁業中心の異業種の住民の多い周辺旧町関係者が、観光のための新規事業を推進しようとは考えないでしょう。ですから、雲仙温泉街の改造プランが、周辺住民にとってもメリットがあることを身をもって示すことから始めなければなりません。食材やみやげ物といった物産（もの）の調達、魅力ある名所や産業・文化への情報（こと）の提供、旅館ホテルや商店のサービス業への雇用機会の創出などに、具体的なビジョンを提示することが必要なのです。それには時間と空間をデザインする戦略的ともいえる発想の転換が必要です。今すぐに着手すべきことです。

これは一例ですが、宿舎内の食事をオープンキッチンのバイキング方式にして、地場直産の食材に広告塔の役割を果たしてもらえば、周辺の生産者との結び付きが濃くなるでしょう。このことで合併町民の理解を得ることが可能となり、市当局や議会での賛意につながると思います。付け替えのプロセスには雲仙の宿泊施設や売店・商店総ぐるみで関わってこそ展望が開けるのです。雲仙温泉にとって起死回生、正念場のこのプロジェクトは、まさしく第3世代の人たちの行動力にかかっています。

第3回会議で参考資料として提出された島原半島内の小中学生アンケート速報に私にとっては衝撃のデータでした。雲仙市の学童生徒の24%が雲仙温泉を訪問した経験がないというのです。島原市で30%、南島原市で26%の子どもたちが、間近に望めるお山雲仙にも足を踏み入れたことのないのです。雲仙でいえば第4世代の子どもたちを迎え入れることも、雲仙プラン100での大事なミッションです。アメリカ大リーグでは7回裏のセブン・イニング・ストレッチに、ホームチームの観客席で「野球場に連れてって」と観衆が総立ちで歌うのです。同様に「雲仙に連れてって」と雲仙

市の子どもたちが歌い続ける雲仙でありたいものです。この誘いにも半島全体の地図は役立つでしょう。

3. その他の提案

長期滞在の可能性は、休暇村などに滞在した宿泊者に直接聞くことから始めてください。滞在客が何をしたか、どこへ行ったのかを、マイカー、レンタカー、公共交通機関などの移動手段ごとに追跡し、ヒアリングすることが肝要です。皆さんにとってはありふれた平凡な風景を愛でている人たちが意外に多いかも知れません。受け入れ側の感覚と訪問者の関心は異なるかどうかを検証するには、半島全体の正確な地図は欠かせません。

もう1晩の延泊をサポートする「もう一泊屋」（仮称）を起業化することを提案します。超高齢化社会にはいり、自らの運転を放棄した個人客のために、延泊するもう1日の移動手段と案内・サービスを提供する新しい事業の創出です。この事業は宿舎に付帯・包含されるものではなく、独立事業体であることに意味があります。

屋久島では世界自然遺産に登録される以前から、エコツアーを実用化する挑戦が始まってきました。環境庁の屋久島駐在レンジャーが退官して仲間と『屋久島野外活動総合センター』というガイド事業を最初に立ち上げました。いまでは多くのエコツーリズム関連の事業体が島内に存在しています。企業化することで多様なプログラムを用意し、また、広報普及活動に独自性を発揮して、レベルの高いサービスを提供しています。それが顧客の満足度を増し、再訪につながるのです。とはいえ最初は、雲仙の大家族が支えてやってください。

協調と競争はどの観光地内でも、観光地間でも起きています。差別化は観光客の選択肢を拡げることにつながるので、競争原理の導入は雲仙大家族といえども避けられないでしょう。それをレベルやグレードというランク付けによる差別化にしないで、東アジア系の外国人向けの施設に特化する宿舎や、食泊分離やバイク方式などのカテゴリー別の相違でもって棲み分ける。このことを雲仙大家族が受容して、全体での共存につなげていくのがいいと思います。

一方、エコアップ雲仙のように自然風景と調和したデザインの統一で地域全体の魅力度を高め、環境に配慮した温泉街をアピールすることも重要です。差別化による多様化と、トータルデザインという統一のとれたバランスに進路を定めて、雲仙温泉の発展にまい進されることを願っています。10年後に私が再びコメントできるようなら、きっと第2世代の面々も、健在で、活躍されていることでしょう。それを期待しています。

雲仙百年の夢

株式会社 JTB コミュニケーションズ九州

代表取締役社長 小俣 郁雄

2034年12月11日（月）

「ふう〜。」

白濁したお湯と硫黄の匂いが心地よく体と心をほぐしていく。早朝の温泉は格別だ。雲仙を包む大自然と極上の泉質は、ずっと昔のままだ。それがうれしい。

昨夜、羽田を発ったのが21時、長崎空港に着いたのは23時前だった。海上空港の利点を生かして、長崎空港が24時間運航の東アジアの中核空港となってから雲仙温泉へのリムジンバスが深夜も運行されている。東京から3時間ほどで雲仙へ。ありがたい話だ。馴染みのホテルに着くと、24時間対応のコンシェルジュがにこやかに迎えてくれる。深夜に到着する客にとっては、笑顔の歓迎が何よりもてなした。

午前中の検査は問診と簡単な検診だが、長湯は禁物。湯当たりしない程度にお湯から上がることにした。採血のため朝食を取れなかったのが残念だが、明日以降のお楽しみにしておこう。日頃の検査結果は雲仙に常駐する温泉ドクターに一昨日送っておいたから、去年の数値と合わせて診てくれていることだろう。

「数値的には問題ないですよ。仕事は順調ですか？」

温泉ドクターの落ち着いた言葉と態度に安堵した。ここ数か月、十分な睡眠がとれないほど仕事に追われていて、セルフケアどころではなかったのだ。血液検査の結果は、今回の検診滞在の最終日に知らせてくれるという。結果は5日後。保険診療による6日間の定期検診プログラムは、年に1回のリフレッシュにはもってこいだ。

検診の後には、早めのランチ。半島産の今朝採れ野菜、千々石で上がった魚、雲仙牛をフレンチ仕立てでいただくことにした。からっぽの体に、とても東京ではお目にかかれない新鮮な食材を放り込むと、食べる喜びが全身に満ちてくる。デザート、コーヒーまでたっぷり2時間。言うことなし。

滞在3日目。普賢岳へのトレッキングに臨む。国立公園80周年を記念して、20年前から国立公園の保全、管理、案内を行うスタッフは「レンジャー」として登録されている。このレンジャー制度ができてから、住民みんなで島原半島の自然環境を守ろうという意識が強くなり、ボランティアスタッフの登録が増えた。美化活動、整備でコースはどれも魅力的だ。アジア、日本中から年間50万人がトレッキングを楽しむという。

今日のトレッキングガイドのMさんは30代の女性で、レンジャーに就いて3年目だという。3年とは思えない知識とパフォーマンスで普賢岳の頂上まで楽しく案内してくれた。汗の乾きはじめて体が清々しい。

普賢岳の頂上からは遠く熊本、天草を一望する。左に視線を移せば平成新山が、勇壮にその存在を示している。Mさんが静かに言う。「私は45年前の大火砕流を知りませんが、火山とともに生きる島原半島の人々は本当に強いと思います。」

世界ジオパークである島原半島・雲仙温泉。ここは人に生きる力を与える大地だ。

雲仙地区への提言

有限会社 大渡企画・設計
代表取締役 大渡 剛弘

私は、平成 17 年に雲仙古湯地区のまちづくりに携わり始めて以来、地区の方々にたびたびこう言ってきた。「観光」とは字のとおり光を見ること、光とは、国、つまりその地域の光であり、地域の文化や暮らしぶりの発する光であると。

いい観光地に必要な要素は、山や温泉などの自然資源だけではだめで、その地域の人々が、その自然の中で、楽しそうに暮らしている様子や暮らしぶりにあった落ち着いた街なみそのものが不可欠である。そのためには、雲仙地区の人達がいきいきと暮らしていることが第一。

そこに住む人々がにこにこ元気にくらしている、街が明るい、そう言う土壌になれば、訪問者と地区の人との間に暖かいふれあいや、たのしい出会いが生まれる。それが真の観光であろう。

地元の人がいきいきと暮らしている中ならば、観光客はしばらく滞在して見たくなる。このような長期滞在型観光地づくりは、観光地雲仙の目指すべき方向であると思う。

雲仙に通いはじめて、雲仙はなんと恵まれたところだろうと思うようになった。標高 700m で、夏は下界より 4, 5 度は気温の低い冷涼な高原であり、周囲にはたくさんのトレッキングルートや登りたくなる山があり、豊かにわき出す温泉がある。まさに桃源郷のようだと思った。

この豊にわき出す温泉をもっと活用できるのではないだろうか。現在、温泉地獄の源泉は、個別に管理されているが、この中のカンツケについては一元的に管理し、共同の給湯システムとすることにより、湯量を安定的に供給できるようにすることができる。さらにエコな熱源として広く利用してもらうために、きちんとカンツケ場を整備し、宿泊施設などの特定の施設への給湯だけでなく、一般家庭へ安価な熱源として給湯し利用してもらうことも可能であろう。こうなれば、夏は涼しく、冬暖かく暮らせる雲仙地区は、名実共に桃源郷となる。

また、雲仙地区は、山に囲まれた盆地であるが、その盆地の広がり、広すぎず、狭すぎずの大ききで、住んでいる人々の力と意思がそろえば、比較的容易に地区全体のまちづくりを進めていくことができる。今は古湯地区でのまちづくりが進められ、観光客も増えてきておりその成果が現れ始めているが、古湯地区だけでなく、雲仙地区全体が、各地区の特性を活かして、まちづくりを進めていけば、もっと魅力ある観光地になれるし、なにより地区の方々が住みやすくなる。

こうやっていくことにより、雲仙地区全体が生まれ変われば、雲仙地区は、日本の住みたい街ナンバーワンになるだろう。これこそ究極の長期滞在型観光地であろう。

住みたくなる街ナンバーワンを目指す雲仙地区のまちづくりの一環として、是非実現して欲しいことがもうひとつある。

それは、絹笠山の山頂の草原に寝転がって夕陽をながめられるようにすることである。

絹笠山は、雲仙の温泉街から歩いて小一時間で気軽に登れる山で、軽いトレッキングに最適である。頂上からは、東に温泉街、西に橘湾を遠望できる景勝のスポットである。

かつては、放牧されて草原が広がっていたという絹笠山一帯は、外国人観光客にも「サンセットヒル」と呼んで愛されていたが、国立公園になり自然保護が徹底されるあまり、樹木が生い茂り、いまや高木の森林におおわれている。そのために頂上から橘湾を望むためには階段の付いた展望台へのぼらねばならなくなってしまう。また登山道の尾根道も、鬱蒼としげった森林に視界が遮られて、景色を楽しみながら登ることが出来ない。そのせいか、今は絹笠山に登る観光客の姿はほとんどない。赤い屋根がそろった雲仙の街なみは、絹笠山から見るのが最も美しいのに、なんとも惜しいことである。

ただ絹笠山周辺の森は林野庁管理の保安林で、伐採などには厳しい制限があるということで樹木の伐採は禁じられている。しかし、なにも全山の森林を切る必要はない。頂上付近と登山道の要所要所の休憩スポットで通景伐採をすれば、格段に登って楽しい山になるだろう。

林野庁のガードは堅いようであるが、林野庁にお百度踏んでも実現してほしい。実現した暁には、頂上の草原で夕陽を見ながらみんなで盛大にバーベキュー大会をやりましょう。

「プラン」の意義

株式会社梵まちづくり研究所
代表取締役 吉田 道郎

このたび、雲仙温泉の住民・関係者の皆さんが精力を傾けて策定作業に取りかかった雲仙プラン100が、このように無事策定されたことに、お慶びを申し上げます。私にも微力ながら策定に関わる機会を与えていただきましたが、皆さんと時空や思いを共有できたことを光栄に思い、また感謝を申し上げます。

近年、一般的に、まちにとっての「プラン」（構想や計画と呼ばれるもの）が軽視されているように感じています。まちづくりの方向性を検討する作業に住民が参加する意欲がない、あるいはそれを高める機会が設けられない、または計画なきもとに事業が行われる、そういった取り組み方が散見されます。

日本の全ての自治体は、「総合計画」というプランを定めることが法律上決められています。自治体は、国民や住民の税金を預かってインフラを整備したり公共サービスを提供する役目がありますから、お金の使い途について、どのようなまちづくり（あるいは住民の幸せのあり方）を目指し、その達成のためにどのような事柄にどのような手順で投資をするのかを、きちんと定めておく必要があります。それが、基本構想・基本計画・実施計画からなる総合計画であり、計画に基づいて予算が組まれ事業が実施されていきます。

雲仙の場合を考えてみると、雲仙温泉自体は自治体ではありません。近年まで小浜町に含まれていて、平成の大合併後は大きな市の一部になりました。1つの地域共同体ではあっても、自治体でなければ、そのまちの計画を作ることは決して義務ではありません。

しかしながら、雲仙温泉では25年前から「プラン」を作ることに意義を見だし、関係者が額を寄せ集めて議論をして雲仙プラン50をまとめました。そして一定の時を経て、まるで伊勢神宮のご遷宮のように、改めてこの地域の重要な行事が受け継がれ、地域、そしてプランに新たな命が吹き込まれたこととなります。

自治体でもないのにプランを作ったことには、それなりに切実な理由があったのだと思います。もちろん、雲仙温泉の場合は環境省が大きなプレイヤーの一人ですから、その音頭のもとに集まったということもありますが、それ以上に、地域の経済的活性化や暮らしの質の向上を図っていくためには、定期的に、地域の問題や潜在力を把握し議論を重ね方向性を改めて据えることが必要ですし、立てたプランが対外的なPR材料にもなり、また住民の連帯感を創り出すツールにもなったはずです。この点が、雲仙温泉にとって非常に重要なことに思います。

雲仙温泉のような小さなコミュニティで、自らの発意で「プラン」を作り続けていることは、日本中を見渡しても特異な例でしょう。しかし、ある土地にある一団の人間が住む時、そこには方向性や取り決め事が必要であるという、非常に根源的なことが雲仙では大事にされていると言えます。この点、今後も自信を持ち続けていただくよう願っています。

特に今回、時間を惜しみ力を振り絞っていただいたワーキングの皆さんには、その労苦をねぎらうと同時に、将来に向けて大いに期待を掛けたいと思います。

人の変化が地域の変化

財団法人 阿蘇地域振興デザインセンター

事務局長 坂元 英俊

その昔、雲の上の盆地に噴き出す温泉があり、そこに人が集まり集落が生まれました。いつしかその地域は雲仙と呼ばれ、人々の暮らしの場が国立公園となり、数々の旅館の増加とともに日本有数の温泉観光地へと変貌してきたのです。そして今、新たな雲仙地域が生まれつつあります。

島原半島・雲仙地域の持つ、人や歴史、文化、特徴ある自然をもう一度見つめ直し、地域の人々の手で紡がれた雲仙プラン100は、2034年に迎える国立公園指定100周年に向けた、雲仙地域のあり方を示す中長期の地域再生計画だと位置づけられています。地域づくりを進める行動の中心は、地域に住む一人一人です。行動計画は、地域の人々との協働の取り組みですが、大切なのは、この計画に携わる人々の旅館やホテル、商店などが、お客さまに選ばれる質の高さとこだわりのあるものでなければなりません。お客さまに選ばれる雲仙地域になることが、経済的にも持続可能な地域の再生なのです。

お客様は、温泉に恵まれた気持ちの良い地域で、気持ちの良いもてなしを受け、優雅でゆっくりとした滞在時間を過ごしたいと思われています。このプランは、そのための雲仙地域を創造するプランです。雲仙プランを策定する過程で、はぐくまれた、仲間との信頼関係、また希望や夢を共有しながら、この計画に関わる皆さんが個人としての変化を起こしていくことも必要です。そして、プランの進行に合わせて、自分の旅館やホテル、店の変化も実感できるのかは、ひとつの目安かもしれません。プランを進める皆さんが互いに関心を持ち、声を掛け合う。この基本的な姿勢に磨きをかけていきましょう。自分たちの地域の良さをどれだけ自慢ができるのか。その自慢がこだまして人が集まってくるのです。このことが、つぎの世代への誇りにもなります。

一日一歩でも地道な変化の積み重ねが、3日後、3ヶ月後、半年後、1年後、3年後、25年後の雲仙地域を創りあげていくのです。

語り合いの笑顔、接客の笑顔、自分への笑顔、いつも笑顔でいられる。これは、変化を実感しているからこそその笑顔の積み重ねかもしれません。

この「雲仙プラン100」の策定に参加させて戴き、感謝いたします。

未来の雲仙・島原半島の皆様へ

島原振興局管理部長

西 貴史

私は、今年4月に島原振興局へ異動してまいりました。生まれも育ちも長崎市内で、島原勤務は初めてであり、これまで半島の外から雲仙・島原半島を見てきました。

雲仙は、日本で最初の国立公園で、四季折々の自然を楽しむことができ、硫黄の香りがする温泉がとても印象に残っていました。特に、ツツジや紅葉の季節には、何度か訪れたことがあります。随分前になりますが、仁田峠にツツジを見に行った時に、当時のアイドル歌手の名前がついた馬に乗って遊歩道を散策したことや、温泉街で食べた温泉たまごや湯せんべいの味は、今でも記憶に残っています。

今回、「雲仙プラン100」の策定にあたっては、行政委員の一人として参加させていただきました。策定委員会では、未来の雲仙・島原半島のまちづくりの主役となる若いワーキングメンバーの皆様が、雲仙や島原半島内の他の地域の皆様と交流しながら議論を重ねられ、プランづくりに取り組まれた結果を、毎回報告していただきました。策定委員会やワーキンググループの目的は、もちろん「雲仙プラン100」を策定することではありますが、特に、若いワーキングメンバーの皆様がプラン策定に向けて議論することによって、今後の雲仙・島原半島のまちづくりについて考える良い機会になったのではないかと思います。

「雲仙プラン100」は、25年後のまちづくりの方向性を示すものであり、その実現に向けて様々な事業を掲げたプランではありますが、すべての事業を実施することは現実には難しいところがあると考えられることから、未来の雲仙・島原半島のまちづくりを担う皆様が、どの事業を重点的に実施するかについて十分議論しながら、訪れた方々の記憶にいつまでも残り、また訪れてみたくなるような雲仙・島原半島を目指していただきたいと思います。

島原半島の活性化のためには、雲仙の活性化が不可欠であると考えており、行政の立場からも個人の立場からも、これからの雲仙・島原半島を応援していきたいと思っています。

25年後の主役たちに残すメッセージ

プラン100プロジェクト、ワーキングの皆さんご苦労さんでした。

理念、将来像、実現のための戦略、行動計画見事に作成されました。

戦略1、雲仙・島原半島の一体的取組みの強化、ですが半島内3市を合併させることが早道とも考えます、人口の減少は解りきった事でもあるし、現在3市の連携はうまくいっているとは思えない。

戦略2、雲仙の自然資源の保全・再生・継承については、同じく減少と高齢化で活動する人の確保を考える必要がある。

戦略3、戦略4は地元が存在する各種団体の理解と連携を確立して実行する事に期待したい。

戦略5、大変重要なもので人材不足ではどうしようもない、またそこに住む人々も観光資源であることを忘れてはならない。

このプロジェクトを実践するには、相当な覚悟がなければ20年後の夢は達成されないだろう、そうならない為に英知を駆使して頑張り理想に向かって達成してもらいたい。

成すべきことを成そうと決断せよ。

いったん決断したことは必ず実行に移せ。

フランクリン

2011年11月10日

七條健

“雲仙プラン100”の成就を願って
雲仙の若者よ
“爆発して、希望の星となれ!!”

雲仙ロータリークラブ
Re. Born 雲仙 実行委員会
委員長 宮崎 高幸

私たち雲仙ロータリークラブは“雲仙プラン100”プロジェクトを高く評価します。
本プロジェクトの基本理念、使命、戦略・戦術の各項目成就に期待は大であります。

私たち雲仙ロータリークラブは1年前、創立40周年記念行事として、50周年を目標に“雲仙再生、Re. Born 雲仙50”を立ち上げました。

その目的は、ロータリークラブの本来の基本方針である職業奉仕・社会奉仕・新世代活動・親睦等の諸奉仕活動を通じて10年、20年、50年後を見据えた地域活性化への貢献に寄与すべく会員の総意からであります。

記念行事内容は

(1) 第1部、“環境、観光、健康”「雲仙エコ・ケンコウ・カンコウ 雲仙の過去、現在、そして未来へ…想いを込めて!」をテーマにした市民公開の基調講演

(2) 第2部、地域住民特に次世代の若者をお迎えしてのパネルディスカッション

で雲仙の過去、現在を総括して次世代未来の雲仙への闊達なご意見と活力ある意見交換が披歴され、参加者に多大の感動と将来の雲仙活性化に大きな示唆をいただきました。

雲仙国立公園75周年の光栄ある歴史を刻んだ先人千達の期待に応えるべく次世代の若者たちが、現状を厳しく把握し、夢と希望・活力再生を目指して、諸活動の将来ビジョン実現に、雲仙の若者たちの爆発力を具現化していただきたいと念じます。

“危機感なくして再生なし” “爆発力なくして推進力・進歩なし”であります

1 時代の風を読み、先取りする気概と勉強を!(人が地域を作り、地域は人を作る)

“世界は常に変化している。地域はこの世界と共に変化して成長していかなねばならない。地域の物語は幾度も書き換えられねばならない。時代認識の原点を更に議論して頂きたい。先進観光地雲仙の停滞減速の要因分析、現状分析そして将来の風を肌で感じる創意工夫の具体化を訴求し、実践して頂きたい。

2 雲仙の国際化実現を!(英語は世界共通語、雲仙の若者は恐れずに英語を口にしよう)

雲仙国立公園は日本の観光地のメッカであり、聖地である。先人は英語、ロシア語を駆使し、お客様を接遇し、お客様の満足度向上に貢献した。

世界の共通語である英語でのおもてなしは差別化戦略の実践である。25年後の国立公園100周年には、雲仙は外国観光客で賑わいを取り戻し、交流パーティーが盛んであろう。

21世紀は人間の大自然への回帰の時代である。心が癒される高原リゾート雲仙の自然林、温泉浴に国内外のお客様は満足感を肌を感じ、英語、中国語、韓国語が飛び交う。雲仙の人々の心からのおもてなしに国際化した雲仙の知名度が国内外に響くであろう。21世紀は皆様若者たちが雲仙の主演であり、新しい時代到来である。

3 長崎県・九州観光の覇者としての差別化戦略を!(目標:日本一の観光地を実現)

21世紀はアジアの時代である。発展途上国 BRICS(ブラジル・ロシア・インド・中国)の台頭、交流人口の主演となる。旅行願望・交流意欲は人の感性であり、ソフト志向であろう。ハードからソフトへの人間の嗜好シフト・満足感充足度である。

大自然を抱く雲仙の出番である。HTBのArtificial(イベント主流)、長崎のHistory(歴史遺産)に対して、雲仙のNature(自然)を人々は肌で体感し、感性の歓びに浸って頂く。阿蘇-霧島-湯布院-別府との九州自然縦断、横断の観光ルートの主演としての高い志を目標設定し、リーダーシップを具現化してほしい。

高い見識、“目標は高く、やればできる”“本物(本質)を見極め、新しい時代を切り開くパイオニア”としての気概と実践力の素養を身につけるべく努力し、勉強して頂きたい。

4 雲仙の文化芸術の森づくり、環境科学大学(仮称)創設を!(若者が定着する基盤を)

21世紀の日本はソフト志向、知識集約型の地方分権・知価社会へ国の姿が移行する。観光客の知的欲求、若者の頭脳流出、高齢者の生涯教育の受け皿としての雲仙の新たな姿を描き、その実現への人的資源の選択と集中が問われる。

雲仙の芸術村、音楽が森に響く雲仙、火山・地質・環境学の研究拠点、市民も学べる市民大学を誘致創設し、若者流出防止、高齢者、観光客に新たな雲仙の魅力を創出提供して頂きたい。長崎大学環境科学部-長崎県環境部-雲仙市の3者連携・協力(Ecoキャンパスビレッジ)と来年度開催のジオパーク世界大会を好機として捉え、文化・知的拠点としての発展拡大を実現してほしい。

5 “開かれた雲仙”の定期的情報公開・メディア活用を!(観光四季に定例発表を)

強いサッカークラブは多数のサポーターが支援する。“雲仙プラン100”の知名度、存在感を内外に発表する。雲仙ファンクラブ、サポーターづくりを目標にメディア(新聞・テレビ)に雲仙の四季折々・春夏秋冬に定期発表する等、綿密な対メディア作戦を展開し、1年を通じて常に“雲仙”の文化の文字が躍り、人々脳裏に“雲仙ブランド”を強く印象づけよう。メジャーな“高原リゾート雲仙”の地位を確立することを期待します。

真夏の夜の25年後の夢

前雲仙旅館ホテル組合長
豊田 康裕

雲仙プラン100策定委員会が一応の終焉を迎え、いよいよ次のステップへと若いメンバーを中心に踏み出そうとしている時に当たり、25年後の雲仙のありようとそこに関わる人々の生き様がどんな形であるのか、はるかに想像の彼方にあるような気がする。

今回の委員会の立ち上げ時に「これからの雲仙の求めるものはなに？」との質問に、「不易流行」と答えたのだが、数回の議論の中にその具体策を指し示すことなく過ぎてしまった。変わらざるものは「あるもの探し」のなかで多くの発見があったことと思うが、変わらなければいけないものへの新たな取り組みについては、新しく組成される「雲仙プラン100地域づくり委員会」の今後の活躍に期待するところが大きい。

アクションプランの円滑な実現を目指すとともに、マーケティング手法の積極的な導入によって、時間の経過、社会情勢の変化に沿ってのプランの引直しの勇気も持たなければならないと思う。

かつて、青年観光会で「島原半島を考えるシンポジウム」を主催したことがあったが、その当時は半島との関わり合いは地産地消や1.5次産業などをテーマの中心としたもので「まちづくり」の言葉が盛んに飛び交ったものだった。そのときの議論や人的交流がその後どれほど深まり、進化をしていったかは全く心許ないが、今日現在の地域間協働のためのコミュニケーション手法は数段のレベルアップがなされていると思われるので、「半島内の相互理解」をテーマの一つに掲げるのは至極順当なことかもしれない。

しかし、ここで少し逆サイドからの提言を。

(財)日本交通公社の原重一さんと「雲仙テーマパーク論」を議論したことがある。世界レベルから見てもなく「雲仙国立公園」は非常に区域が狭い。居住する住民も少ないしそれも減少の一途である。頼みの従業員も教育や住環境の利便性の悪さ故に域外通勤が増えている。(冬の厳しさや家電への硫黄の影響もある。) そうなると雲仙地区内の消費が低迷、商売もむずかしい。ひとに優しい観光地を標榜するにも「声かけ」をするマンパワーに不足する、「そこに住まう人のいきざま」をテーマに交流観光を目指すにも商売や工芸や製造者、生活者?にも欠ける状況が歴然とある。

そこで「住職同居」や「住職近接」など端からあきらめて、住民は利便性のいい都市部に住み(できれば雲仙市内、愛野あたりが適当か)雲仙へ自家用車もしくは公的交通機関(雲仙市の住民サービスへ期待する)で通勤する。通勤するので就労意欲が上がる(生活から就労への意識の切り替え)、住環境ではないので清掃への意識も高まる(ゴミ一つ落ちていない雲仙の町並み)、洗濯物など生活臭はみじんも感じさせない。生活の利便性が手に入るので日常生活への不満が解消する(病院も学校も銀行もコンビニも近い)。交際相手を探すにも住まいの近くに若者はたくさんいる。居酒屋もある。

雲仙温泉はというと、生活感はないがきれいな町並み、整備された歩道、並木道もある、道路脇にはテラス・カフェ、道路に面して素敵な外観のホテル、旅館。散策するのに車の心配がない、地獄もあるし、適当なトレッキングコースもある。すれ違う人たちはホスピタリティー・マインドいっぱいのお客者たち。（でも、街角で遊ぶ子供たちの姿がない）

快適なホテル・ライフ。温泉旅館ならではのおもてなし。

研究されたおいしい料理。お買い物にはショッピング・アーケードで島原半島内の、長崎県下の名産、逸品が買い物できる。

えっ、まるで雲仙がTDL（東京ディズニーランド）になったみたい。

いままで深く考えるのを避けていた、住環境の問題を解決する。

雲仙温泉を観光客のためだけに作り替える。

島原半島内の連携は、どうぞ、儲かるから雲仙で商売をしませんかと呼びかける。

日本中のどこにもない「見せる自然、体験する自然、脱世俗の景観、安全安心の保安、観光特化のゾーニング」を作り上げるための努力を事業者も、行政もやる。地域から上がる金・GDPはその地域のためだけにつぎ込む。その結果、利益GAINを、税金TAXを手にする。かつての雲仙の住民は快適な生活を手に入れる。

そしてなにより、雲仙を訪れるお客様が全員ハッピーになる。

そうした構想を持つのは不謹慎ですかネ？

はじめの一步

雲仙商店協同組合理事長
本多 善彦

雲仙地区に関するまちづくり計画報告書は、昭和47年度に策定された雲仙プラン50をはじめ、両手の指ではとても足りぬほどの数が策定されてきた。それらの報告書は、程度の差こそあれ地元の意向をくみとりながらまとめられたものであった。そこに編み込まれた方向付けや計画案に通底しているものは、今回のプラン100の中にも脈々として受け継がれている。

しかし、いままでの報告書に謳われた諸々の計画は、その大部分が計画にとどまったまま実現に向けて動き出していない。

古湯商店街周辺地区では、平成17年度からの取り組みで19年度には地元発意の街づくり協定書が締結され、加年度からファサード整備事業が具体的に動き出し、22年度までに38棟の改修が完了し、街なみが生まれ変わった。

古湯のまちづくりは、予測をこえる進捗を見せてくれたが、その要因はなんだったのだろうか。それまでの計画とどこがちがっていたのか。

いくつかの要因が考えられる。まず第1に半径100mのまとまりの良い区域だったこと。この区域だったからこそ地元が一丸となってまちづくりへの意思を固めることができた。第2に公的な支援が得られたこと。第3に地元協議会の役員が蛮勇をふるって一步を踏み出したこと、この3点が大きかったのではないかと思う。

あまりにも広い区域を対象として、いわゆる総花的な計画に取り組んでいくと、どうしても力が分散されて、目に見えた成果を出すまでに長い時間がかかったり、途中で雲散霧消したりしてなかなか実現できない。

古湯では、半径100mの地区で計画を固め、一点突破的に役員が事業に向かって一步を踏み出すことができた。どんな事業であれリスクを伴うので、事業をすすめるキーマンには、最初の一步を踏み出し、そのリスクをひきうける覚悟と勇気が要る。

プラン100を、実現に向けて進めるためには、まずとりかかる事業を一点に絞り込んで実現性の高い計画としていくこと、そこに千慮万考を重ねたら、リーダーは勇を鼓して一步を踏み出すことが必要である。

次世代の担い手に告ぐ！

着眼大局、着手小局、勇を鼓してその一点に向かい一步を踏み出すべし。

25年後の主役たちに残すメッセージ

雲仙自治会会長
小地獄・札ノ原自治会長
森 義春

さてまず25年後雲仙がどうなっているかを想像してみると、まず住民の減少が進む。現在70歳以上の方270名程の方々がおられますが自然と減少する。若者はどうかというと、働く場所がなく、地域内への新規流入は望めない。活性化に必要な活動の中心となる若者を育てる力がなくなった地域は衰退の一途となろう。何件かのホテル、わずかな土産品店、食堂といった地域になってしまうのであろうか？自然に任せればそのような地域になるのではないかと思われてならない。

このように書くと“そうならないためのプラン100”と声が飛んできそうですが、より厳しく現実と向き合って生きていかないと夢で腹はふくれない。

今回の事業で若者が雲仙地域を理解し愛着を持ち連帯感を強めたことは評価したいが、やはり雲仙を大きく左右するのは各事業所の方々です。是非、雲仙をこの若者たちを生かして育て次の世代へ繋げていけるようお願いをしたいと思います。

25年後この心配が笑い話になるよう祈って。

「雲仙天草国立公園指定 100 周年」を迎える、 雲仙地域の「担い手たち」へ

雲仙湯のまち通りを考える会会長
雲仙温泉まちづくり事業委員長
加藤 一隆

雲仙プラン100プロジェクトを立ち上げ約一年余り、若手の有志からなるワーキンググループのメンバーは、2034年に迎える「雲仙天草国立公園100周年」を見据え、多くの時間を費やし「雲仙地域」の過去の歴史と文化を確認し、現状の課題を踏まえ、島原半島の中での「国立公園雲仙」の在りようと長中期的な将来のビジョンを描かれ、25年後の雲仙温泉の「担い手」として覚悟を決められたことに敬意を表します。

「まちづくり」とは、「如何にそこに次代の担い手を作るか。如何に担い手に継承するか。」だと思います。2011年皆さんは今、自らの思いでこの雲仙温泉の担い手の道を選んだのです。楽しく街づくりをし続けていくためには、多くの仲間がいることです。覚悟を持った、担い手が数多くその土地にいること……。 「住む人も、訪れる人も、働く人も、そして、この雲仙に関わる人も……。 」国立公園雲仙を大切に思う人々を、どれだけ多くの「担い手」として関わってもらおうか……。 ?です。

2034年、雲仙温泉がどんな街になっているのか楽しみです。そして、その時そこに「新しい担い手」がいるのか……。 ? 継承し続けられる街が出来ているのか……。 ? 楽しみです。

「ブランド」とは、求める人の「期待感」と体感した人の「満足度」が、一体となって「信用あるブランド」と呼ばれるものと思います。

「老舗」とは、100年間「紆余曲折」時代の波を乗り越え、継承し続けて「信用ある老舗」と言われるのだと思います。

是非、「担い手」の皆さんの手で「リゾート地雲仙・ブランド」を、「老舗 国立公園雲仙」を築いてください。

未来の主役たちへ

雲仙市観光協議会
島原半島ジオパーク推進連絡協議会員
加藤 宗俊

未来の雲仙人である人達へ、残しておける言葉は少ないです。

- ①自分が正しいと思うことは、まず始めてください。（歩き始めなければ、何も始まりません。
- ②目の前の事に流されて、100年後に必要とされるものを忘れないで下さい。
- ③正しい事をしていても、孤独になります。自分の偏見や我が儘や誤った考えではないかぎり、一人でもやり続ける覚悟を持ってください。
- ④それぞれのプロジェクトは、それを達成するために、長期間取り組む必要があります。あせらずに諦めずに続けてください。
- ⑤自分がやりたいと思ったことは、実行するためのプランを作り、色々な人達に、自分のプランを話してみてください。チャンスが生まれるきっかけになると思います。
- ⑥一人が責任者となってやれることは、時間も力も限られています。まず自分の主軸を何処に置くのかを決めて、それをやると皆に表明することが、大切だと思います。

以上、人に語るだけでは、余りにも無責任なので、自分の決意表明をいたします。

私は残りの人生を、通景伐採に全力を尽くして参ります。色々ご協力をお願いしますが、何卒よろしくお願ひいたします。

新しい時代の新しい人々へ ＝怒りと情熱を爆発させ、存在感を示せ＝

小浜町地域審議会 会長

宮田 隆

雲仙賛歌 2 話:

(1) 或る芸術家が叫ぶ“雲仙は天国と地獄だ!爆発だ!!”

雲仙ゴルフ場の緑の芝生に突然裸になり、大の字になって青空に手足を伸ばし寝そべる。“芸術は爆発だ!!”と極彩色で神話と平和を描きなぐった破天荒の画家岡本太郎。その芸術の心はこの雲仙の大自然で育まれたのであろう。と想像の波紋が限りなく広がる。

(2) 或る女流作家の心の叫び“なんとこの自然は美しいことか、この癒しの大自然が、山鳥の鳴き声が私に創作の心を羽ばたかせる”

活水学院寮で森林浴中のハンモックに揺られながら“島原大変、肥後迷惑”を地元尾人から聞き、あの幻の映画の原書“The Big Wave 津波”をものにした。日本美と雲仙の自然美、雲仙の人の心お優しさを葛飾北斎と安藤広重の浮世絵 13 枚に託して、その短編小説に挿入した。“米国初のノーベル賞作家”大地の“パールバック女史”である。

雲仙の自然に感動:

雲仙絹笠山から見る四季折々の景色にいつも感動です。

国見、妙見、普賢そして初冬の青空に一条の噴煙をたなびかせる平成新山、連山から力強い自然エネルギーを肌感じます。見下ろす橘湾、有明海の海原は外洋に広がり、新鮮な海の幸と併せて想像の輪が広がりアイデアの宝庫であります。山の雲仙、海浜小浜・島原半島は豊かな自然がいっぱい、大気を浴び、恵まれた自然環境に感謝です。

雲仙には感動の歴史が今もその名残を秘めています。往時の外国避暑客はこのサンセットヒル(絹笠山:873M)山頂から母国を想い、ふるさとの風景を、そして愛する人への熱い想いを重ねたことであろう。

雲仙の自然が、街が私たちに語りかけます。過去の栄光、現在の混迷、未来の光を!!

そして過去の先人達が幾多の栄華と艱難辛苦を乗り越えて、静かに語りかけます。

『新しい人たちよ、怒りを爆発させよ!新しい時代にたくましく生きてくれ!』と、

『雲仙の若者よ、21世紀のリーダーとなり、キラリと光る雲仙の存在を示せ!』と。

“雲仙プラン100”は多くの諸先輩・賢人達の期待に応えなければ成りません。山と海は不動であり、人が歴史を刻みます。継承は今に生きる人間の努めだからです。

1、20世紀はモノづくりハードの時代：忘れられた日本美、日本人のこころ

20世紀は戦争と敗戦後の国造りの世紀でした。私たちは日本再生に努力しました。しかし、今、日本は閉塞感に追い込まれています。経済大国のしわ寄せが一気に噴出しました。ビジョンなき国家像、戦略なき諸活動故の日本人の精神荒廃・日本美喪失です。

2、21世紀は本物・高質のソフトの時代へ：雲仙再生は日本の再生につながる

21世紀の日本は羅針盤のない時代、荒海での自力航行の時代を迎えました。知恵の結集と創意工夫のソフトがモノをいう時代です。観光業に力強い追い風です。

新たな時代の日本の国の将来ビジョン、新たなシステム構築のために、明確な目標・理念、使命、大胆な戦略が問われています。理念は世界視野でグローバルに、使命は自主性、自立、自己責任で、戦略は大胆に緻密に！“雲仙プラン100”はまさに日本再生の縮図です。本プランを成就するために、自己変革、経営改革、地域再生が不可欠です。

- (1) 先ずは事業経営の健全化であります。事業の健全化なくして地域の元気はできません。**
- (2) お客様の立場に立ったマーケティング・インの満足度実現と差別化戦略の実践です。**
- (3) 情報発信力は地域力雲仙のバロメーターです。**

3、“雲仙プラン100”の主役は新しい時代のあなたです。

雲仙再生のカギは“雲仙プラン100”の着実な実行です。各事業の責任者は一身を賭けて本気で責任をとって下さい。過去と現在を総括し“危機感なくして再生なし”です。“日本なくして世界なし、雲仙なくして日本の、九州の、長崎の観光なし”

過去の栄華に奢ることなく、“新しい時代を自分たちで築く”強い信念と夢実現へ向けて切磋琢磨の日々の努力が不可欠です。

POEM “Unzen” Plan100

Change yourself for future-Unzen
自己変革に挑戦してください
Let us begin day by day, step by step
日常生活から始めましょうよ
Smoking with good sense, but not giving up
観光地ではタバコは吸わない
Pick up dusts in your way by your hands
ゴミは自分で拾う
Start up one hour early, when your slump
スランプ時期は1時間早く出社する
Making something good against your troubles
お客様の提案・苦情をモノにする
Ha-i! You are well come with your smile
訪ねる人、道行くに明るく声を
Play with boys and girls in sensibility
子供たちから感性を学びとる
Talk with Japanese-English, world standard
たどたどしい英語で交流する
Have a knowledge of University and the world
大学に学び、“知”に遊べ
Catch the winds of a coming new world
新しい時代の風を読み取る
Be ambitious for knocking the next door
時代を切り開く気概・挑戦力を
Working in the farms with sweat
ジャガ芋を掘り、稲刈りを楽しむ
Be reality and be practical plan
現場・現実・現品の3現主義に徹する
Healing with breezing and mocking birds
緑の風に癒され、山鳥の声に感動し、
In the great calm nature
閑寂な自然と対話する
Catapilizing trees on the path through a woods
キャタピラで材木を運び、
Lighting on the path in the dark woods
暗い森に太陽の光を、風を通す
Sound music and galleries with high quality
質の高い音楽と芸術展!
Healing, Highland Resort Area, Unzen!!
自然浴、温泉浴の癒しの高原リゾート

皆様のひたすら活動する姿が目には浮かびます。一緒に汗をかきたくなりました。

日本再生・国立公園再生のモデル地区雲仙誕生に自信と誇りを持って下さい。

20年後、そして50年後“雲仙プラン100”成就、乾杯!!

雲仙・島原半島に栄光あれ!! Viva Unzen!!

25年後の主役たちに残すメッセージ

第5回ジオパーク国際ユネスコ会議組織委員会

事務局長 杉本 伸一

雲仙国立公園の美しさは火山に負うところが大きいと思います。約430万年前早崎半島の海底火山に始まった島原半島の生成は、約50万年前からはその半島の中央部で雲仙火山が活動を始め、現在までその活動が続いています。雲仙火山はまだ若い火山です。これからも必ず噴火を繰り返すはずです。

雲仙火山の歴史に残る3回の噴火を見ると、噴火のたびに犠牲者を出しています。特に220年前の寛政の噴火では、眉山の崩壊により約1万5000人という多くの犠牲者を出し、国内の火山災害では最大の死者です。当時の島原及び有明海沿岸の人口を考えると、その数字は、今回の東北大震災と比較してもその大きさが分かります。

しかし、火山は災害をもたらすだけではありません。火山活動は火山そのものの秀麗な姿や変化に富んだ地形をつくり上げてきました。そのため、火山の周辺には風光明媚なところが多く、多くの人々を魅了しています。また、地下水がマグマなどの熱で温められた温泉や、山ろくに湧き出す湧水などその恵みをいただいて生活しています。雲仙はまさにその恵みの中にあります。

島原半島は火山が創り出した素晴らしい大地の遺産とそこに暮らす人々の営みが評価され、世界ジオパークに認定されました。しかし、世界ジオパークに認定されたからといって、すぐに何かが変わるわけではありません。変えるのは、そこに暮らす人々が変わるのです。貴方たちが主役です。

人々は、美しい景観を眺めるだけでは満足しなくなってきました。素晴らしい自然とそこに暮らす人々との関わりに感動し、それが思い出として残ります。

観光ポスターも自然だけが写ったポスターよりも、地元の人が写ったもの、さらには観光客と地元の人と一緒に写ったポスターが心を惹きつけます。素晴らしい自然、そして時としては厳しい自然と、地元で暮らす人々と訪れた皆さんが共に関わりあう、そのような仕掛けが必要です。雲仙を訪れたお客様に、何を感じ、何を持ち帰ってもらえるかなのです。そのようなアイデアを出し合い、実行し、島原半島を引っ張っていくのが25年後の主役たちです。

2. 雲仙プラン100策定ワーキングメンバーの雲仙プラン100への思いとそのため
やりたいこと

(順不同、敬称略)

雲仙地域

福田 努
七條 彰宣
石田 真隆
村上 輝晃
加藤 隆太
福田 智弘
佐々木 雅久
荒木 美智子
藤島 康弘
永吉 操子
松田 芳充

島原半島

大向 あぐり
山口 忠宗
山田 華子
本多 弘和
堀川 二雄
林田 慎也
三宅 和徳
山本 健一郎
J A島原雲仙青年部小浜支部

氏名	ふくだ つとむ 福田 努
自己紹介	職業：民芸モダンの宿 雲仙福田屋 趣味：ゴルフ、レコード収集、車、オーディオ、 飲食店めぐりなど他趣味多数有り 活動内容：全旅連青年部、旅行会社観連団体など
25年後の自分や地域に向けた“ひとつ”メッセージ	世界の各国の観光客が何泊も滞在し、時にはお弁当持ってトレッキング、時には家族や気の合う仲間とテニスやゴルフ。また、雲仙からちょっと足を伸ばして、海釣りや歴史探望、町の人とのふれあいなど何日も滞在したくなるような地域でありたい。 さらに今の子供たちが将来戻りたくなるような経済的にも魅力ある、活力ある雲仙であって欲しい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・世界への発信。特にアジアへ。アジアに一番近い温泉半島を紹介したい！その為には、以下の事が重要である。 ・アクティビティー（島原半島・雲仙内の楽しみ方）の整理と地に足が着いた確実な運営、そして時代にあった広報の展開。

氏名（ふりがな）	しちじょう あきのぶ 七條 彰宣
自己紹介	雲仙在住。 趣味を楽しむというより、仕事のことで頭が一杯。 旅行ができればいいがそうもいかないもので、TVによる海外文化・娯楽・スポーツに触れることや、仕事を兼ねた食べ歩き 飲み歩きが仕事の息抜き。
25年後の自分や地域に向けた“ひとつ”メッセージ	雲仙が九州における山岳アクティビティーのメッカになることを目標に頑張りたい。 2011年の12月に思い描いた雲仙になっているか？そのためにどれだけ努力したか？満足している？と25年後の自分に問いかけたい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・アクティビティーメニューの開発 アウトドアファッション系ブランドや雑誌を通じた発信による雲仙のイメージアップ ・上記とのコラボイベントの開催

氏 名	いしだ まさたか 石田 真隆
自己紹介	雲仙の古湯に住んでいます。ホテル東洋館で働いております。別にホテルプロデュースという会社をさせて頂いております。趣味はゴルフ、野球観戦、旅行です。現在様々な組織に所属させて頂いております。雲仙旅館ホテル組合、雲仙青年観光会など。プラン100では拡大事務局のメンバーです。
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	<p>《自分へ》</p> <p>還暦を迎えている自分は自然と一緒に楽しく過ごしているか？その歳になって気がつく雲仙の良さはなんですか？と聞きいてみたい。</p> <p>《こんな地域であってほしい》</p> <p>たくさんの滞在型の観光客で賑う温泉地であってほしい、特に夏は落ち着いた雰囲気を持つ滞在型の避暑客がいるリゾート温泉地になっていて欲しい。また雲仙に住む人が島原半島の人達と仲良く暮らし、情報を共有する事で今まで以上、楽しんでいて欲しい。</p>
そのために、5年以内に自分がやる！こと	<ul style="list-style-type: none"> ・雲仙地内の外部への情報発信においても、内部への情報共有もできる大連絡網を構築したい。そして島原半島の連絡網と連携をとりたい。 ・訪れる度に違う顔を見せてくれる観光地、特に5人～8人ぐらいの小グループが楽しめる観光コースや滞在メニューがたくさんある滞在型の観光地づくりのお手伝いをしたい。

氏名	むらかみ てるあき 村上 輝晃
自己紹介	職業：地方公務員 趣味：運動 活動：雲仙青年観光会、消防団
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	【25年後の自分】 ・退職後、小さな店の経営者 ・自治会長 ・生涯学習の講師 【こんな地域であって欲しい】 ・住民が皆家族のような付き合いができる地域であって欲しい ・笑顔の絶えない地域であって欲しい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・雲仙青年観光会専務理事 ・雲仙プラン100地域づくり委員会 部会長 ・九州大会出場選手の輩出（空手道協議）

氏名	かとう りゅうた 加藤 隆太
自己紹介	雲仙温泉街の真ん中辺りで湯せんぺいを焼いています。 趣味は、食べること・呑むこと・体を動かすこと
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	25年後の雲仙温泉 島原半島や長崎・熊本の人達が休日や特別な日を過ごすような、そんな雲仙温泉になっているのでしょうか？訪れる人を100%笑顔にする。そんな笑顔を生むことに喜びを感じられる私たちになっているのでしょうか。街角には笑顔や笑い声が溢れて、温泉や自然、四季折々の山の恵みに感謝し、お客さまと一緒に楽しむ我々でいるのでしょうか。島原半島の中心で島原半島の素晴らしさを雲仙の色に乗せて発信しているのでしょうか。そうあってほしいと私は思います。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・雲仙温泉での街歩きを楽しむお客様を増やしたい。 ・遠江屋本舗を雲仙らしい遠江屋らしい個性あふれるお店にする。 ・遠江屋本舗を島原半島のアンテナショップにする ・商店街の既存のお店が雲仙らしく、また個性あふれるお店にしていきたい。 ・雲仙らしい個性を持った新しいお店が新規出店できるようにしたい。 ・滞在時間を延ばしていった結果、宿泊するお客様が増える雲仙にしたい。

氏名	ふくだ ちこう 福田 智弘
自己紹介	・ 雲仙温泉 ・ 僧侶 ・ フットサル、フリーサイクル
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	雲仙に住んでいる人全員が住みやすい、住んでいて良かったという街にしていきたい。もちろん自分も含めて。

氏名	ささき まさひさ 佐々木 雅久
自己紹介	・ 雲仙市在住 ・ 雲仙ガイドさるふぁ代表 ・ 観光プロガイド
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	25年後、もし生きているなら 今と同じくガイドをやっていてほしい。 今と変わらない素敵な雲仙で…。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	雲仙ガイドさるふぁの拡大。 雲仙の魅力紹介本、写真集の制作。

氏名	あらかみ みちこ 荒木 美智子
自己紹介	・ 雲仙公園内 ・ 荒木精肉店(昭和元年創業)に2001年に嫁ぎ、2005年に中国茶の店 茶仙をオープン。今はもっぱら雲仙ピロツケを販売
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	毎日笑って暮らしていきたい。 もちろんその為に街を人々が散策し、温泉からは声がひびき、地獄では温泉たまごを食べ写真を撮り、地獄巡りをしている人がいて、山には登山者、白雲の池ではハイキングやボート乗り、食堂では笑い声が聞こえてくる。 この街で暮らしていることに誇りがもて、住民の満足度が高い生活。 いやな話(不満、不幸)は聞きたくない。来仙された人々がここに住むと楽しそう、何かありそうと想像出来るような街であってほしい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・ 便利さと不便さを心地よいものにする。(例、バスは少ないけど、乗り合いタクシーなどで移動は不自由ではない。待ち時間は入浴、休憩所) ・ 島原半島の人々の雲仙温泉街への利用促進。(国立公園になったのは県民の皆様、島原に住む人々のおかげ。感謝し利用してもらう)

氏名	ふじしま やすひろ 藤島 康弘
自己紹介	千々石生まれの千々石育ち。現在諫早市在住。 2年ほど前から雲仙温泉街の駅に勤務しています。
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	世界ジオパーク認定や上海航路開通による外国人観光客増加を期待。満足して帰っていただけるように島原半島の魅力のPR、スポット整備をし、25年後には立派な国際観光地になっている事を願う。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	何よりも情報発信。 25年後の事を考えるよりも先に「今」を確実に伝えなくては。 どんなに雲仙の魅力的な場所があっても誰も知らないのでは来てくれない。 どんなイベントをやろうとしても誰も知らないようでは意味がない。 事前告知と事後報告。 その情報発信の多国語化。 イベントの事後報告は今回来られなかった人にも、次回は来ようと思ってもらう為に、重要だと思う。

氏名	ながよし みきこ 永吉 操子
自己紹介	雲仙温泉 街の駅 職員 スポーツ、絵画、PCをいじること、その他 雲仙の名所をご案内
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	25年後は立派な老人となっていますね、認知症になっていない事を望みます。 日常生活や買い物など安心して暮らせる地域となってほしいですね。出来れば、若者が働ける場所が増えて活気ある半島になってほしい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・足腰を鍛え車に頼らない生活、なるべく歩いて出かけるようにする。 ・興味あることに挑戦する。 ・この職場で培った案内の知識を地元で生かす。

氏 名	まつだ よしみつ 松田 芳充
自己紹介	住所地：島原市（過去に3年間、雲仙温泉住民） 職 業：長崎県島原振興局総務課に勤務 担当は、自然環境やジオパークに関する業務で、雲仙の公園施設の管理などにも従事 趣 味：バードウォッチング
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	今回、地元の若者が積極的に動いたことが、頼もしく思えた。 この動きが止まることなく活動の輪が広がり、雲仙の本質を変えないまま新しいことを取り入れ、変わっていく雲仙を応援していきたい。 25年後は県を退職していると思うが、相変わらず雲仙やワーキングのメンバーと関わり続けたいと思う。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・歩いて楽しく魅力ある登山道作りに関わっていきたい。 ・「あるもの探し」に参加し、宝の掘り起こしをすすめたい。

氏 名	おむかい 大向 あぐり
自己紹介	雲仙諏訪の池ビジターセンターで働いている大向です。 諏訪の池周辺の自然や自然の中での楽しみ方を、たくさんの人達に紹介するお仕事をしています。
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	25年後は〇〇才。 きっと、この職場にはいないだろうけど、それまでに島原半島の魅力や自然を広めていきたいです。 そして、たくさんの人が訪れ、島原半島に何度でも訪れたいと思える場所になっていますように。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・どんどん、諏訪の池を含めた島原半島の魅力や自然を発信していく。

氏名	やまぐち ただむね 山口 忠宗
自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・元消防士 ・船釣り ・東日本震災ボランティア（南三陸町そうめん流し）
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	<p>島原半島の活性化を目指すなら、一つの市となった姿で有るべき。半島振興のシンポなどに参加してみると、それぞれ目指すところに違いが感じられる。それも良しとすべきであるが特に観光産業や観光行政の振興を論議するなら市の境界はいらない。</p> <p>♪ 国境（市境）のない世界を考えてごらん♪（ジョンレノン・イマジン）</p>
そのために、5年以内に自分がやる！こと	<p>3市の境界が接するところを選定し、3市を貫くジャンボそうめん流しを実現し一体化へ向けた活動家が一同になったイベントを仕掛ける。</p> <p>ありきたりのそうめん流しでなく、カーブや落差（途中に水車）などでビックリ仰天とする。</p> <p>スタッフが揃えば可能です。</p>

氏名	やまだ はなこ 山田 華子
自己紹介	<p>株式会社リクルート（九州じゃらん）</p> <p>島原半島を担当させていただき、半島内のお宿様や行政様にお世話になってます！</p> <p>出身：大阪 生まれも育ちもバリバリの大阪人♪</p> <p>現住所：長崎市</p>
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	<p>【25年後の島原半島】</p> <p>「長期休暇はしばらく島原半島にしようか」と観光客に言われるようにならずと居たくなる場所であって欲しいなと思います。食べ物も遊ぶ場所も温泉も、長く滞在しても飽きることがないほど材料があり、さらに半島内のそのような施設同士の連携がとれていてどこに行っても不自由なく過ごせるような場所であることが理想です。</p>
そのために、5年以内に自分がやる！こと	<ul style="list-style-type: none"> ・個人客の集客をじゃらんとし増やせるように、楽しい過ごし方の提案を宿泊施設様や行政様、観光施設様にし続ける。 ・島原半島に来たことがある方、今後くる方のマーケティング調査

氏名	ほんだ ひろかず 本多 弘和
自己紹介	島原市在住。自営業。趣味、ランニング、カメラ、食べ歩き。 島原青年会議所に在籍し、島原半島の明るく豊かなまちづくりの創造に向け活動をしています。同会を通じ、島原半島世界ジオパークの推進及び活用についても取り組んでいます。
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	25年後の私は還暦を迎えます。孫がいるおじいちゃんになっていることでしょう。今、私が関わる地域振興活動が及ぼす地域への影響として「島原半島だから住みたい！行きたい！」そんな地域になっていることを望みます。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	<ul style="list-style-type: none"> ・自社の地域貢献活動の充実及び、従業員の意識向上。 ・自分なりの島原半島の魅力を発信し続けること。 ・今関わる活動について、10年後、20年後を見据えた活動であるかを検討し、よりビジョンとコンセプト、ターゲットを明確に出来ているかを検証し続け、今後の活動につなげていくこと。

氏名	はやしだ しんや 林田 慎也
自己紹介	住まい 雲仙市愛野町 職業 公務員（雲仙市役所）
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	若い人達が住みたいと思えるような、島原半島になってほしい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	地域活性化のため、地元でイベントをやってみたい。

氏名	ほりかわ つぎお 堀川 二雄
自己紹介	会社経営 雲仙ロータリークラブ幹事 長崎県をオリーブで元気に！『雲仙市オリーブ協議会』事務局 雲仙市まちおこし団体『七つの風』事務局 島原半島活性化プロジェクト『島コン』事務局 日本一！『海上大綱引き』実行委員会事務局 地域資源を調査研究活用する会代表世話人
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	私も25年後には、還暦を過ぎていますので家族とのんびりと故郷千々石で過ごしながら、引き続き地域活性化のお手伝いが出来ればと考えています。 島原半島には、自然、文化、景観、食、水、温泉、火山等、豊富な魅力的財産がありますので、地域資源を活かした取り組みが評価され、全国各地から癒しを求めて沢山の家族連れで賑わいのあるマチになって欲しいと思います。 そのためには、これからも地域資源を守り活用しながら、地元民が協力して『おもてなしの心』で交流人口の促進と、定住人口の増加を目指していかなければなりません。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・主要景勝地での自然景観保全と眺望確保の点から、雑木林の枝打ち、伐採が必要だと思えます。 ・地道ではありますが、交通幹線道路でのごみ拾い等のボランティア活動は継続して行って行きたいです。 ・農商工連携で取組んでいるオリーブ栽培を軌道に乗せて、農業者、商工業者、観光事業者と協同で半島の活性化を図りたい。

氏名	みやげ かずのり 三宅 和徳
自己紹介	任意団体職員 謡曲
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	第1次産業をしっかり守っていき、安心できる農作物を生産し続けてほしい、漁業も資源を守り育て経営基盤をつくりあげてほしい。 地の利（不利）を活かして、いつまでも素朴な田舎であってほしいものです。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	1. 民泊を推進し農林漁家の副収入を増やす。 2. コミュニティを大切にするため地区の為になりたい。 3. 老後を楽しむために体を大事にしたい。

氏名	やまもと けんいちろう 山本 健一郎
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	このままの島原半島の自然を生かした、“観光”と“住”の先進地となっ てほしい。観光では半島全体がまとまって雑誌・インターネット・クチコ ミなどで魅力を伝える。住には、観光で島原半島を知った人々から住んで みたいと思われるような、住居環境、インターネット環境、税の軽減策な どで、より沢山の人々を受け入れる体制になっていて欲しい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・都市部では当たり前になっている光インターネットを島原半島へ誘致。

氏名	J A 島原雲仙青年部小浜支部
自己紹介	J A 島原雲仙は、長崎県の島原半島全域をエリアとする J A です。半島の 中心には雲仙普賢岳があり、平成 21 年には地球科学的な特徴が認められて 「島原半島ジオパーク」として日本最初の世界ジオパークに認定されまし た。雲仙普賢岳周辺には数多くの温泉がありますが、私たち青年部小浜支 部は小浜温泉や雲仙温泉を有する雲仙市小浜町で活動を行っています。 長崎県はジャガイモの生産量では北海道に次ぐ生産量がありますが、わた したち支部員 20 人もジャガイモ農家がほとんどです。ジャガイモ栽培の経 験を生かし地域社会に貢献しようと、小浜町内の小学生を対象にジャガイ モの植え付けから収穫までを体験する農業体験学習や地元で開催される各 種イベントにも積極的に参加し、ジャガイモの P R を行っています。
25年後の自分や地域に向けた“ひとこと”メッセージ	地域活性化として農家と異業種が活性化していくために目的が共有できる 地域にしたい。 農業分野では地域のリーダー格となり国産・地元農産物の魅力を伝え、輸 入農産物に負けないパワフルでフットワークの軽い農業者でありたい。 また後継者や若者が夢を語れる活気ある地域を目指したい。
そのために、5年以内に自分がやる！こと	・農業と観光業の連携を深めたい。 ・ホテル、旅館組合で北串産のジャガイモを使用してもらおう。(販路開拓) ・地元特産品「じゃがいも」の魅力を伝え、地域活性化を図る。

3. 雲仙プラン100発表シンポジウム 来場者からの応援メッセージ

平成23年12月11日に開催した、雲仙プラン100発表シンポジウムの来場者から寄せられた応援メッセージを掲載します。

- 島原半島が一体となり、それぞれの地域が対等に意見を出し合い、訪れる観光客の方々が今までどこでも体験したことがない感動を味わい、楽しんでもらえるよう、私たち民間も協力できるよう努力できればと思います。(20代、女性、長崎県在住)
- 2年間に4度目雲仙を訪れ、来るたびにこの町の変化に感動させられている。皆様の努力がきっと良い結果につながると信じている。頑張ってください。(30代、男性、長崎県在住)
- 一緒に頑張っていきましょう。(30代、男性、雲仙市在住)
- 未来を創る、若い力の活躍に大いに期待しております。頑張ってください！！(40代、女性、南島原市在住)
- 現実化を頑張ってください。(50代、男性、雲仙市在住)
- 21世紀は君たちの時代、主役です。頑張ってください。魅力ある雲仙にしてください。(70代、男性、雲仙市在住)
- 小学校での取り組みは、郷土愛を育む効果を見込まれ、とても良いと思いました。大学生の発表は、デジタルサイネージの提案がとても良かったです。雲仙プラン100のみなさんには、今後を楽しみながらPDCAサイクルを意識して頑張っていたいただきたいと思います。島原市内の各団体が連携できるようになれるとよいと考えています。(70代、男性、雲仙温泉在住)
- 高く評価します。若者に対する期待大です。(70代、男性、雲仙温泉在住)
- 23年後の雲仙を見届けたいという気持ちが強くなった。「雲仙プラン100」発表を聞いて、すべて現実となったらと想像すると身震いする程です。要は計画に終わらないようにすぐ行動に移すことだと思います。若い人々の行動力に期待したい。(70代、男性、雲仙温泉在住)